幼小期における地域の色をテーマとした探究的学習の研究（Ⅰ）

―大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）との共同研究推進を中心に―

藤井　弘也[*1]・藤井　康子[*2]・麻生　良太[*3]・都甲　由紀子[*4]・
西口　宏泰[*5]・木村　典之[*6]

【要　旨】　本研究は，大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）と大分大学との美術教育に関する共同研究の推進を目的として立ち上げた研究グループを中心に，大分県の特色のある自然を生かした，幼小期における地域の色をテーマとした学校において導入として行ったワークショップと探究的学習の提案を行う。

【キーワード】　探究型学習　ワークショップ　美術教育

Ⅰ　研究に至る経緯

1　大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）の取り組み

平成２５年に出された県立美術館のあり方検討のため設置された知事諮問機関の答申に示された，「将来を見据え，管理運営に合わせて，芸術文化を活用した人材育成と地域振興が必要」という指摘に対応するため，平成２６年４月に美術館の指定管理者である公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団内に「教育普及グループ」を設置し，公立小中学校において，美術館出張授業を展開するようになった。内容としては身体を使ったワークショップや布を使った空間芸術，地域の色づくりなどで，その取り組みについては，大分県立美術館教育普及グループ発行の「びじゅつってすげえ！2015-2016」[1)]にまとめられている。平成２７年４月に県立美術館が開館し，２階に教育普及スペースが設置された。平成２７年５月には県下全小学生を対象に，「小学生ファーストミュージアム体験事業」として無料招待を行った。

2　大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）と大分大学との協議

教育普及活動が，「芸術文化を活用した人材育成と地域振興」という目的に合致したものであ

平成 28 年 10 月 28 日受理

＊１ふじい・ひろなり　大分大学教育学部理数教育講座（物理）
＊２ふじい・やすこ　大分大学教育学部芸術・保健体育教育講座（美術）
＊３あそう・りょうた　大分大学教育学部附属教育実践総合センター
＊４とごう・ゆきこ　大分大学教育学部生活・技術教育講座（家庭科）
＊５にしぐち・ひろやす　大分大学全学研究推進機構（機器分析分野）
＊６きむら・のりゆき　大分県芸術文化スポーツ振興財団（県立美術館）学芸企画課主幹（大分県教育センター指導主事併任）

ることを学術的に検証することを目的に，財団は平成２６年に大分大学と協議を開始した。協議の大学側の窓口は教育担当理事であり，財団の窓口は専務理事として，大学と財団との協議の上，研究グループが立ち上がった。平成２７年に入って一定の方針が定まり，財団との共同研究として，研究基盤の確立を目指して科学研究費補助金の基盤研究（B）に「幼小期における地域の色をテーマとした教科融合型学習の開発」というテーマで応募し後に４年継続研究として採択された。

同時に「大分県立美術館連携プロジェクト」という事業名で平成２７年度学長戦略経費(機能強化推進枠)を獲得し,外部資金獲得のための探究的型学習やルーブリック作成のための資料収集のため，先行研究を行っている大学や，関連する施設への調査をおこなった。同時に，研究計画の精度を高め，申請書の説得力を向上し，現在国の注目する研究分野，手法と本研究との関連や位置づけに対する示唆を受けるための旅費として活用した。

３　研究基盤の整備

科学研究費を活用した研究を始めるに当たり，研究の基盤づくりに向けた関係機関との調整や，実施段階における支援を行うための組織として，財団内に事務局を置く「科学研究にかかる『地域の色・自分の色』実行委員会」（実行委員長：照山龍治）を立ち上げ，研究実践校の選定を行った。その結果，初年度については，美術館のワークショップの教育効果の検証は姫島村の小・中学校および津江の小学校，佐伯の小学校，県立盲学校について行い，研究実践校としては姫島の幼稚園および小学校，佐伯の小学校，県立盲学校を対象とすることとした。加えて，関係機関の調整を行うため，実行委員会に関係機関連携推進協議会を置くこととした。表1に協議会，表2に実行委員会メンバーの氏名を除く職名を挙げる。

表１　関係機関連携推進協議会員リスト

協議会内の職名	所属・所属先での職名
代表	財団理事長，元ユネスコ日本政府代表部特命全権大使・元文部事務次官
顧問	大分大学経営協議会委員・元文部科学事務次官
顧問	弁護士・元大分県教育委員長
顧問	姫島村村長
会員	姫島村教育委員
会員	姫島村教育長
会員	大分大学理事（教育担当）
会員	大分大学附属学校園連携統括長
会員	大分大学 COC+推進機構コーディネーター
会員	大分県教育庁教育改革・企画課長
会員	大分県教育庁教育人事課人事企画監
会員	大分県教育庁義務教育課長
会員	別府教育事務所長
会員	大分教育事務所長
会員	佐伯教育事務所長
会員	日田教育事務所長
会員	大分県教育センター所長

― 教育実践校校園長 ―	
会員	財団専務理事・元大分県教育庁総務審議監（会員総括）
参与	日本感性教育学会副会長・元大分大学教育学部教授
参与	大分大学教育学部教授（研究代表者）
参与	京都大学大学院教授（連携研究者）
参与	東京大学大学院教授（連携研究者）

表２　実行委員会役員リスト

委員会内職名	所属・所属先での職名
委員長	財団専務理事・元大分県教育庁総務審議監（関係機関連携推進協議会会員総括）
副委員長	大分県教育センター副所長兼総務企画部長（教育研修，研究成果の活用担当）
副委員長	大分県教育庁義務教育課指導主事（兼）大分県教育センター指導主事（県教委担当・研究協力者総括）
委員	大分県生活環境部自然保護推進室主査（ジオパーク関係者総括）
委員	姫島村役場企画振興課（姫島村担当・研究協力者）
監事	公認会計士・財団監事
参与	大分大学教育学部准教授（研究分担者総括）
参与	財団美術館学芸企画課教育普及グループリーダー学芸員（研究協力者）

Ⅱ　研究推進計画の概要

１　研究目的と意義

全国的にも特異な地形・地質を有する大分県姫島村において地域の「色」への気づきから自然科学，歴史，文化等に繋がる探究的な学びを幼稚園年長から小学校において開発・実践し，それらの検証結果を基にルーブリックを開発して,「色」を主題とする教科融合型学習プログラムの学習モデル（姫島）とその一般化を目指すモデル（大分）の構築を目的とする。

研究の意義としては，地域特性を主題とするアートとサイエンスが融合した探究型学習モデルの確立と地域活性化や課題解決など地域創生に繋がる学びの提案である。今回研究のきっかけとして提供する美術館のワークショップは感性と好奇心を刺激し，学びの動機付けとなる。また，地域に特徴的な鉱物や植物等に意識的に触れることにより，地域の魅力を感じることができる。

２　研究内容と方法

地域の教育資源の調査および探究型学習の先行事例の調査，学習課題と授業展開例の明示化や，授業開発・教育実践による「ひめしま（大分）探究型学習プログラム」の確立，ひめしま（大分）探究型学習評価ツールの確立を行う。

方法としては，姫島村で先行している地質地形から地域を再発見するという「ジオ学習 [2)]」に「色」という視点を付加して，大分大学と大分県芸術文化スポーツ振興財団（以下財団という），大分県教育委員会，学校現場とが連携し，幼小期におけるアートから始まる教科融合型学

習「ひめしま探究型学習プログラム」とその一般化をめざす「おおいた型」を開発する。モデル校に対しては，「色農園」・「色のアトリエ（マテリアルボックス）」等の設備を整えるなどして研究の実施体制を確立する。なお，本研究グループには大野歩（大分大学教育学部生活・技術教育講座（保育学））氏もメンバーとして研究を進めているが，本稿においては，投稿規定の重複投稿にあたることから，著者から外している。

Ⅲ　本年度実施研究成果

図１　ワークショップ（草花の採取）

１　ワークショップの教育効果の検証

本年度は実施形態として本研究グループが依頼したものとして行い，実質財団と連携して実施したワークショップの第一弾は５月２３日，２４日に行われた。日田市津江地区の小学校で，ワークショップの内容は，２３日が小学校１～６年生５５名対象にした「超・ぼわんぼわん…空気（くうき）のカタチをつかまえるっ！」であった。大きなビニール袋に風を送り，空気を感じる活動であった。２３，２４日にかけて行われたのが５・６年生２０名を対象にした「日田色をつくる…いのちの色・植物」であり，校庭にある草花を煮て色素を取り出し，繭玉に染色して素材とし，他の部品を使って自分なりの作品を作り出す活動であった（図１）。この活動後の子どもに対するふりかえりシートの集計結果の一部を図２に示す。また，教職員に対するふりかえりシートの集計結果の一部を図３に示す。

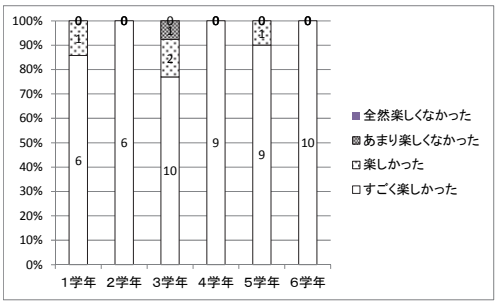

図 2-1　空気のカタチをつかまえるのは，たのしかったか（関心・意欲・態度）

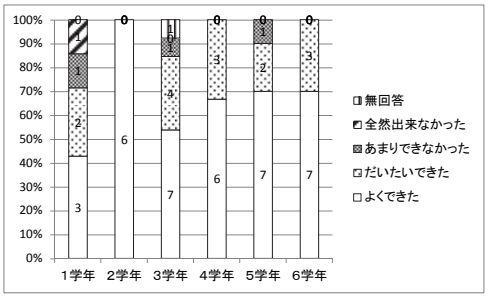

図 2-2　友達と協力して，空気を使って遊ぶことが出来たか（思考力・判断力・実践力）

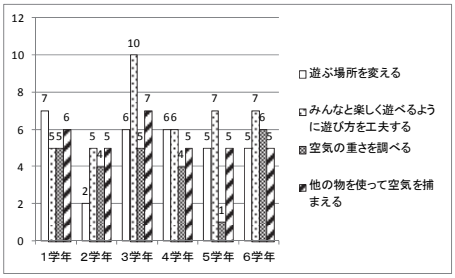

図 2-3　自分のあそびで,「もっと楽しくしよう」と思ったことは

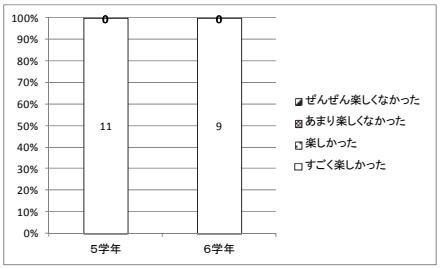

図 2-4　「日田色をつくる」活動についてどう思うか
（関心・意欲・態度）

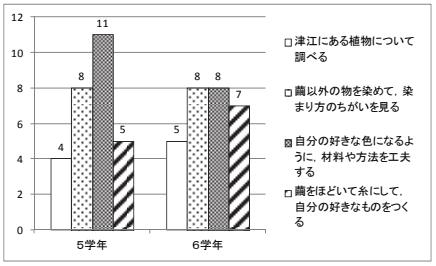

図 2-5　これからじぶんでやってみたいと思ったこと

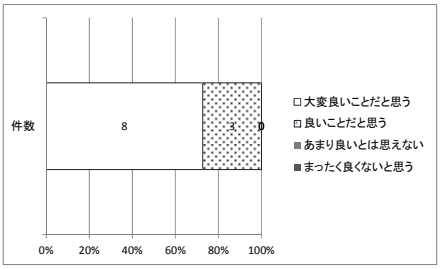

図 3-1　「超・ぼわんぼわん」「日田色をつくる」の取り組みについてどう思うか

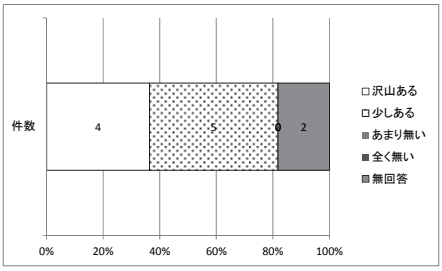

図 3-2　今後の教育活動に取り入れたい点はあるか

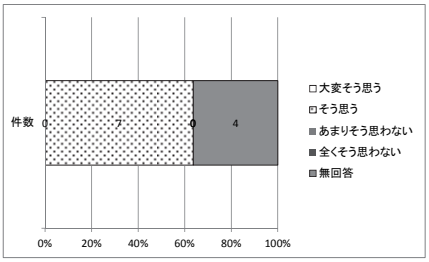

図 3-3　子どものふるさとの見方に影響を与えるか

第二弾は７月７日と８日に姫島村の小学校で，ワークショップの内容は，７日が小学校１～３年生３３名を対象にした「影をつかまえろっ！－日光写真の楽しみかた－」であった。ジアゾ感光紙を使用して，自分で考えたいろいろなものの影を写す活動であった。７，８日にかけて４~６年生３６名を対象に行われたのが「姫島色をつくるⅢ…墨に五彩あり？」であり，姫島特産の車エビの殻を燻し焼きしたものを顔料とし，油を燃やした煤を集めたものを墨汁としてグループごとに大判用紙に作品を描く活動であった（図４）。この活動後の子どもに対するふりかえりシートの集計結果の一部を図５に示す。

図４　ワークショップ（墨に五彩あり？）

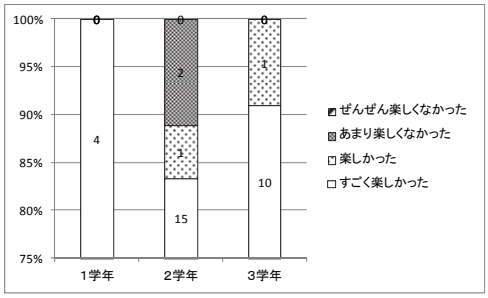

図 5-1　影をつかまえるのは，たのしかったか

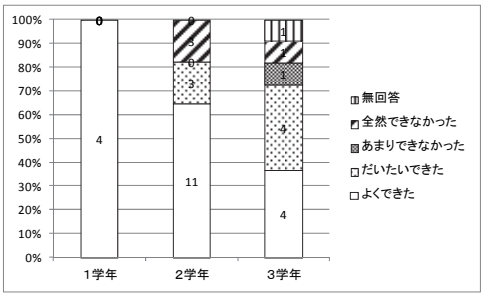

図 5-2　自分の作った影の作り方を友だちに教えたり，友だちから教えてもらいながら，遊ぶことができたか

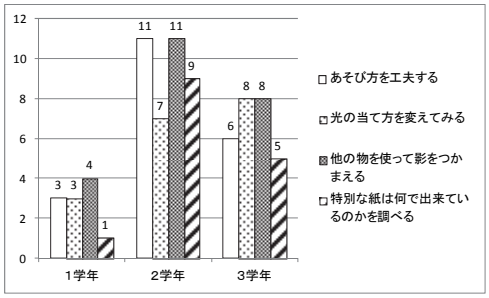

図 5-3　自分のあそびで，「もっと楽しくしよう」と思ったことはどんなことか

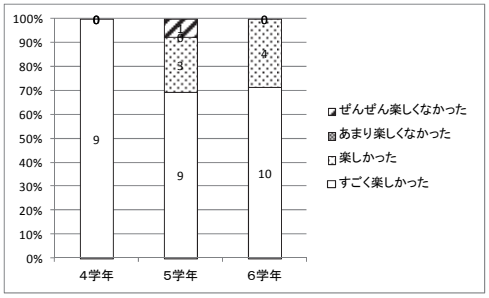

図 5-4　「姫島色をつくる」活動について，どう思ったか

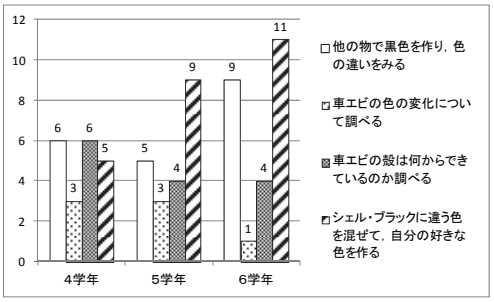

図 5-5　これから自分でやってみたいと思ったこと

図６　ワークショップ（佐伯色を作る）

第三弾は７月１１日と１４日に佐伯市の小学校で，ワークショップの内容は，１１日が小学校１～４年生６２名を対象にした「ふわもこ…布と戯れる！」であった。７m四方の白い布をはためかせたり，空気をとらえたり，その中に入って遊んだりするものであった。１１，１４日にかけて４年生２２名を対象に行われたのが「佐伯色をつくる…ザ・ピグメント」であり，地域で拾い集めた色々な色の石を砕いて顔料を作る活動であった（図６）。この活動後の子どもに対するふりかえりシートの集計結果の一部を図７に示す。

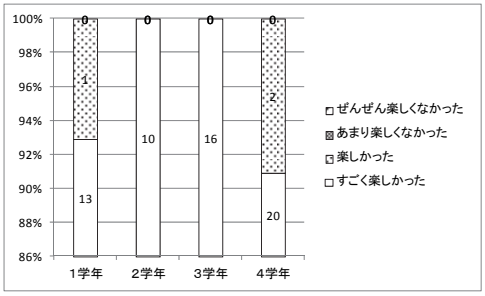

図 7-1　布で遊ぶのは，たのしかったか

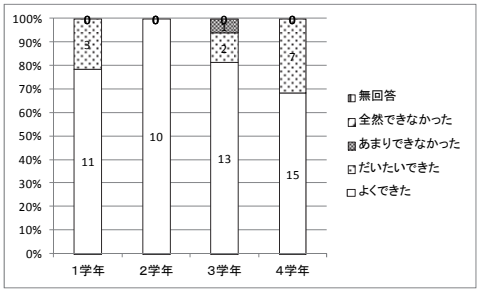

図 7-2　友だちと協力して，布を使ってあそぶことができたか

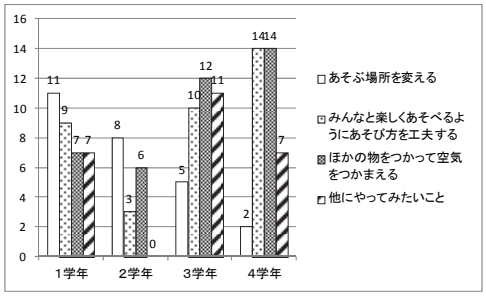

図 7-3　自分のあそびで，「もっと楽しくしよう」と思ったことはどんなことか

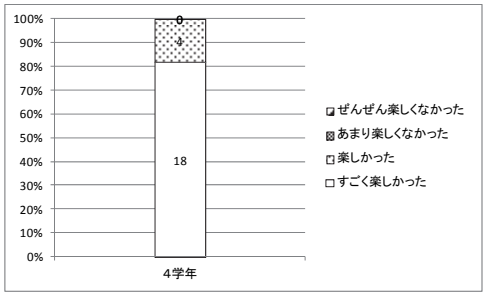

図 7-4　「佐伯色をつくる」活動について，どう思ったか

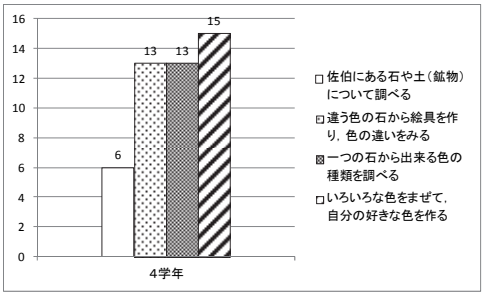

図 7-5　これから自分でやってみたいと思ったこと

2　研究実践校における授業実践

美術館のワークショップを導入として，２学期以降に色をテーマとした探究型学習の研究を姫島村の幼稚園，小学校および佐伯市の小学校において実践することにした。実践に先立ち，「色に関する生活実態調査」を行い，ワークショップ以外の教育活動や生活体験による教育効果についての経年的な変化をとらえることとした。実践の計画にあたっては，既存の教科や学校行事と関連させ，具体の指導計画を立てた。

1)　姫島村の研究実践

幼稚園では「色のはじまり」,「色みつけ」を行い，色への関心を持たせる。小学校では４年間の継続研究を考慮し，３年生を対象とし,「姫島色コレクション」,「ひめしまいろファームをつくろう」を行い，地域の色に関心を持ち，ふるさとの魅力について考える端緒とする。

2)　佐伯市の研究実践

小学校２年生に「色の始まり」,「色・イロいろコレクション」および「色のかけらであそぶ」を行い，色への興味関心を持たせる。小学校４年生には「宇目色コレクション」,「宇目色を地域の方に届けよう」および「宇目の色ってどんな色？」を行い，色の探究を通して，ふるさとに関心を持たせる。

Ⅳ　今後の研究に向けて

本研究は４年継続研究の初年度である。また，研究実践校での授業実践については，本稿投稿後に実施するため，状況については次稿にて取り上げることになる。本稿では研究を開始するまでの体制づくりに主眼を置き，共同研究としての一つの大きな目的である美術館ワークショップの教育効果の検証のためのアンケート結果の一部の数値化できるものを掲載した。アンケート結果からは興味関心や意欲態度などすでに高い数値が得られている。しかしこの結果では母数が少なく，統計的な分析は不可能である。実際はアンケートに自由記述の項目を設け，その記述内容からキーワードを取り出し，分析していくことを計画している。特に４年継続研究による教育効果を検証することから，前述した生活実態調査の結果の変遷とワークショップを積み重ねたことによるアンケートの自由記述の内容を含めた結果の変遷を経過観察することとしている。そのため，アンケートは記名でとっており，個人に対する教育効果を検証できるように準備している。

今年度の活動及び色に関する生活実態調査を含むアンケートの分析の詳細および美術館のワークショップを導入とした，色をテーマとした探究型学習の研究については，研究グループのメンバーが，それぞれの専門性を生かした形でまとめてそれぞれの所属する学会で口頭発表や論文の形で成果を発表する予定である。すでに第一弾として大学美術教育学会「美術教育学研究」へ投稿済みである。

［謝辞］

本研究の実施にあたり，ご協力いただいた姫島の先生方と宇目の先生方，大分県芸術文化スポーツ振興財団専務理事の照山龍治氏と塩月孝子氏，県立美術館の榎本寿紀氏をはじめとする教育普及グループの方々に，心より感謝いたします。

［付記］

本研究は，平成 28~31 年度科学研究費基盤研究（B）（一般）（16H03799）の助成を受け行ったものである。

参考文献

1）榎本寿紀・木村典之・山本麻代，2016,「びじゅつってすげぇ！2015-2016」，アートフル大分プロジェクト実行委員会
2）おおいたジオ国際フォーラム，http://www.c-linkage.co.jp/oita.geo-f/

A Study in Discovery-Oriented Learning about the Typical Colors in a Local Area for Kindergarten and Primary School education

—With a Focus on the Process of Promoting Joint Research with OPAM—

FUJII, H., FUJII, Y., ASOU, R., TOGOU, Y., NISHIGUCHI, H. and KIMURA, N.

Abstract

The intention of this study is to put forward a proposal for discovery-oriented learning about the typical colors in a local area for kindergarten and primary school education. This study was curried out by a team formed for promoting joint research in art education between Oita University and OPAM(Oita Prefectural Art Museum).

【Key words】 Discovery-oriented learning, Workshop, Visual arts education